

---

# 異世界で犬に憑依した

巨峰水

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界で犬に憑依した

### 【Nコード】

N1919BA

### 【作者名】

巨峰水

### 【あらすじ】

平凡なサラリーマンだった男が交通事故で死んだ直後、目が覚めると何処とも知れぬ森の中だった。犬になった体。空に浮かぶ三つの月。なぜか見えるステータス画面。わからないことは数あれど、とりあえず空腹を満たすために狩りに勤しむ日々。なりゆきで狼の群のボスになったりもしながら、ある日、ゴブリンが攫ってきた少女を助けたことで、犬は人里に下りることになる。

処女作のため稚拙な駄文ですが、暇潰しにどうぞ読んでやって下さい。

## プロローグ

1 .

私の名前は高坂隼人<sup>「たかねははやと」</sup>。

ごく普通のサラリーマンだった。年は28歳の独身で、彼女いない歴は28年。つまりいたことがない。もうすぐ魔法使い（笑）になる、という以外は何の変哲もない人間で、断じて悪人などではなかったのだ。

だと言つのに、私は畜生道に落とされた！

私がいったい何をしたというのだ。

私は今、犬だ。

話は私の主観時間にして15分ほど前に遡る。

私はいつものように営業に出かけていた。そのついでにゲーセンに出かけて行列のできるラーメン屋で昼飯にした。べつにサボっているわけではない。単に仕事より息抜きの時間の方が多いだけだ。ちゃんと仕事もしている。

そんなこんなで退屈な、もとい、充実した仕事を切り上げようと、私は会社に戻るため営業車で高速に乗った。

時速100キロオーバーで車を走らせていると、私のケイタイが鳴った。運転中だが構わず出ると、相手は会社の先輩だった。

『高坂、お前いまだどこ！？』

「どうしたんすか先輩、そんなに慌てて」

『どうしたじゃねえよバカッ！ お前今日吉田社長と打ち合わせだる！？』

ちなみに吉田社長とは、私が担当する大口の取引先の社長である。私だって伊達に5年も働いてはいない。吉田社長の所は私自身が初めて開拓した大口の取引先なのだ。

「……………」

私は自身の記憶を思い返してみる。

するとあら不思議、今まで意識に登らなかったのが不思議なほどにあっさりと、吉田社長との大切な打ち合わせの事が思い出せた。

マジヤバス。

吉田社長との打ち合わせが午前11時からで、今が午後4時過ぎだ。

『社長さつきこっち来て、すっげー怒ってたぞ！ 今すぐ社長んところ行って謝ってこい！』

「わ、わかりましたっ！ い、今すぐ行ってきます！」

言い返して電話を切った私は、慌てて吉田社長の電話番号を呼び出しながらもアクセルを最大まで踏み込んだ。

吉田社長も私に電話くらい入れてくれれば良いのに、と自分のことを棚に上げて思いもしたが、よくよく考えると吉田社長に教えたケータイの番号は仕事用に使っている方（私は二つのケータイを私用と仕事用で使い分けているのだ）で、今もっているのは私用のケータイのみ。仕事用のケータイは……と考えるすぐに答えは出た。家に忘れてきたのだった。

ともあれ、こちらのケータイに吉田社長の番号が入っているのは不幸中の幸い、と言えるのか？

何度かの呼び出し音の後、『お掛けになった電話番号は……………』というアナウンスが流れる。

吉田社長が出ない。

ヤバイ。

手のひらにじっとり嫌な汗をかく。

ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ。

などと、そんなことばかり考えていたときだった。

ズルツと、ハンドルを握る手が滑った。

「あっ！」と声を上げた時にはもう遅かった。私は車ごと中央分離帯へと突っ込み……………

ふと目を開けると、森の中だった。

土と草木の独特な匂いが混ざり合い、芳醇な森の香りとして私の鼻を刺激した。

(ど、どこだ、ここは……?)

もやもやとはっきりしない意識を、頭を振ってどうにか覚醒させる。なんだか違和感を覚える身体を何とか動かし、私はしっかりと四肢で大地を踏みしめた。

……………。

そう、四肢で大地を踏みしめたのだ！

ええ、そうですとも。私は「ここはどこ？ 私は誰？」などとベタなことは申しませんし「なんだか身体がおかしいなあ」などと呑気な勘違いもしませんでしたとも。

自分の身体のことだ、すぐに異変には気付いた。(ど、どこだ、ここは……?) などと思っただのは単なる現実逃避だ。

まず第一に、身体感覚が嗅覚をはじめとして異様に敏感だし、なにより立った時の視界が異様に低い。四つん這いで立つことに全く違和感を感じないし、おまけに少し前までは存在しなかった、新たな感覚がある。それが、尻の少し上から伸びている感じだ。

私は後ろを振り返った。しかし「なぜか」首だけを回すことができなかつたので、身体ごとその場で回るようにしながら、自分の尻の辺りを見る。

ぐるぐると回り続ける私。そして視界に移る乳白色の、あるいはクリーム色の体毛に覆われた尻尾。

まるで「犬」のような尻尾だが、今の自分の顔を見たわけではないので断言することはできない。

鏡とかどっかにかいないかな、とキョロキョロと辺りを見回してみる。鬱蒼と木々が生い茂る、深い森の中である。

富士の樹海に行ったことはないが、こんな感じなのかもしれないなあ。

そう思いながら視線を移動させていき……、  
私はここが地球ではないという確信を得た。

森の木々の梢の間から、まだ昼間のようなのに月が見えたのだ……  
3つも。

昼間に月が見えるのは良い。地球でも良く朝方とか見えたし。しかし、地球の月は3つもないのだった。それとも、私が知らない間に月が二つ増えたという可能性も………ないな。

「……………ウオフ……………」

まあ、いい。良く分らないことは後回しだ。

乳白色の体毛。尻尾。三つの月。森の中。

色々と気になることはあるが、まずはさらに情報を集めてみることにしよう。

まず第一に、私の身体が犬であれ何であれ「子供」ではない、ということだ。これがまだ目も開けられないほどの赤子で、目の前に母親などいれば、たんに転生したのだと納得できるのだが、私の身体は成獣(?)だ。周りを見渡してみるが、私以外は誰も(というか何の動物も)見当たらない。

次に足の裏にある肉球をぼむぼむしてみる。

別になごみたいわけではない。肉球の硬さを調べていたのだ。もし私が生まれたばかりなら、肉球は柔らかいはずだが、触ってみた感じ、私の肉球は堅いようだ。これは今の私の身体が、硬い地面の上なり何なりを走り続けたり歩き続けたりしていた証拠だ。

以上のことから、これが夢でなければ私はどうやらこの身体(犬?)に憑依したらしい。

なんてこった。

「クウーン……………」

悲しげな泣き声が私の口から洩れる。

憑依、ということは私はやはり死んでしまったのか。最後の記憶

は高速で中央分離帯に突っ込む場面だが、あれで奇跡的に生きている、なんてこともないと思うしな。

.....  
まあ、吉田社長や会社の先輩、上司に怒られなくなったのは喜ばしいことかな、と考えてみる。

両親に親孝行などできなかったのは少々心残りではあるが、そんなことよりは今の我が身である。

犬？

それが今の私である。

これが畜生道に堕ちる、ということなのか。理不尽だ。私は少々ばかり不真面目ではあったが、悪人ではなかったというのに。もし神というものがいるなら、盛大に文句を言いたい。

犬で。人間にしてほしい。

はやく人間になりたい、とでも言えば良いのか。

3 .

私は途方に暮れていた。

このどことも知れぬ森の中で目を覚ましてから、どのくらいたっただろうか。空は青空から夜空に変わり、満天の星空と三つの月が、煌々と大地を照らしている。

実は少し前から腹が減っている。

それで色々悩むのは後回しにして、何か食べるものを探しに行こうと思うのだが、こんな森で食べられるものなど見つけれられるだろうか？

キノコ.....は毒があったら嫌だし、草とかも同じ理由で食べたくない。毒の有無なんて見分けられないしなあ。

なにか果物とか生ってれば、と思い、それが木の上にあつたらどうやって採ろう？ と悩む。

私は地面に鼻を近づけ、スンスンといろいろな物の匂いの残滓を

嗅ぎ取りながら、自分がつまそうとを感じる匂いを追っていく。  
……理性的にこんな犬のような真似をしているのではない。食い物を探しに行こうと思っただら、自然と身体が動いていたのだ。

しばらく森の中を進んでいると、「食糧」を見つけた。

白い体毛に覆われた小柄な体躯。ぴよんぴよんと跳ねる小さな身体に長い耳、赤いつぶらな瞳。額から30センチくらいの角が伸びているところが記憶にあるものとは違うが、たぶん異世界だからだろうと納得する。

ウサギである。

どこからどう見てもウサギである。

おいおい、と思った。バターでおいしくムニエルされているウサギ肉とは違うのである。生きているそのままのウサギだ。ここには調理器具もなければ、この身体では火も熾せない。そもそも捌くことすらできないだろう、となれば必然、このウサギを食うにはそのままかぶりつくほかない。

ないわー、と思いつつも、意思に反して私の口からはよだれが視線の先にいるウサギ（仮にホーンラビットと呼ぶことにしよう）に気づかれないよう姿勢を低くする。ゆっくりと足音を立てないよう、ホーンラビットの背後へ回る。

四肢に力を入れていつでも飛びだせるようにする。

「グルル……」

知らず、獰猛な唸り声が漏れる。

うむ。この距離なら逃げられることはないだろう。

いやだわー、と人間だった頃の私は思うが、今はこの犬としての私が強い。

私は一気に飛び出した。全力で距離を詰める私に、ホーンラビットも気づき慌てて逃げようとするが、もう遅い。というか、目の前のウサギより私の方が圧倒的に足が速いのだ。逃げられるはずもない。



もうあと3メートル、というところで私はホーンラビットに跳びかかった。

狙い過たずホーンラビットの首筋に噛みつく私。ホーンラビットが抵抗するように暴れるが、それもすぐに止んだ。

こんな大きな動物を殺したのは、人間だった頃を含めても初めてだ。

普通だったら気持ち悪くなったりしそうなものだが、そんなことはなく、すぐにホーンラビットの腹に牙を突き立てていた。たぶんこの犬？の知識だろう。はらわたが柔らかくて一番うまいのだ、ということがなぜか解った。

腹の毛皮を噛みちぎり、その下の肉へと牙を突き立てようとしたところで、

ポーン

と、実際に音が鳴ったわけではない。ただそんな音が聞こえた気がただけであり、けれどそれだけではなかった。何かを私に伝えるような「感じ」

額のあたりがむずむずする。

なんだ？　と思いつつ額に意識を向けると、不思議な情報が浮かび上がった。

【個体名】ハヤト・コウサカ

【種族】犬・雑種　Lv.3

【称号】森の野犬

【職業】野犬

【パッシブ・スキル】野生の感

【アクティブ・スキル】なし

まるでゲームのステータス画面のようだ。

なぜ急にこれが気になったかというのと、すぐに理解できた。

おそらく、この身体（凶らずも本当に犬だとこれで証明されたわけだが）にあった記憶だろうが、以前はLv.2だったところからLv.3になっている。レベルが上がったのだ。

ホーンラビットを殺したことによってレベルが上がったのだろうか？

というか、【個体名】ハヤト・コウサカって、まんま私の名前ですが。これってどういうこと？

私が憑依したからこうなったのかどうか。まあ、今気にしてもわかるわけもないか。

ちなみに、このステータス画面？は日本語で書かれているが、私が憑依される前の犬が日本語を読める、というわけではないだろう。実際は日本語で書かれているように「感じる」、というところだ。

このステータス画面も、空中に投影されているわけではなく、何となく脳裏に浮かび上がった、というか。

要するに、本来は文字とかではなく、意味とか、概念とか、そういう情報が直接脳に与えられている気がする。私が日本語に感じるのは、単に私が日本語で思考するために、この情報が脳内で日本語に変換されているのだろう。

ふむ。

しかし、ステータス画面が出るなんて不思議なこともあるもんだ。しかも犬・雑種だし。犬でもステータスは見れるんだね……っていうか、雑種で。もう少しなんとかならなかったのか。魔狼とか、魔法が使える魔獣系の存在とは言わないから、せめて狼にして欲しかった。この世界で魔法が使えるかなんてわからないが、ステータスなんて見えるくらいだ、魔法だってあっても驚かない。それにステータス画面にあったスキルという欄。今は「野生の感」しかないが、いずれ増えるかもしれない。魔法的な何かだって覚えるはず。いや、覚えたい。

犬だって賢い動物には違いないが、狼はその犬よりも3倍だか何

倍だか忘れてしまったけど、脳が大きかったはずだ。つまりそれだけ賢い、ということ。人間の頃のように思考できる今は関係ないかもしれないが、何となく犬より狼の方が頭良いし強そうだ。種族的にも狼の方が上位だろう。

いや、まあ、この世界に狼がいるかもわからないんだけどね。

しかし、それにしても。

雑種で。

なんだか落ち込むわ。

「ウオフ〜……」

まあ、ひとまず今はいい。

とにかく今は、食事だ。

私はステータス画面から意識を逸らすと、ホーンラビットの腹に噛みついた。

…………… ホーンラビット、うめえ。

## 第一話 ゴブリンと犬

1 .

私がこの世界に来てから一週間ほどが過ぎた。

あれから何をしていたのかというと、もっぱら森の探索と餌ホーンラビットの確保である。まあ、確保といっても狩ったらずくに食べているのだが。おかげでレベルも上がった。

【個体名】 ハヤト・コウサカ

【種族】 犬・雑種 Lv. 6

【称号】 森の野犬

【職業】 野犬

【パッシブ・スキル】 野生の感

【アクティブ・スキル】 なし

以上が今の私のステータスである。

私がおここに来たときLv. 2だったことを考えれば、たった一週間で四つもレベルが上がったことになるが、私が狩った生き物などホーンラビットだけで、しかもその数は一日2〜3匹ほどでしかないのだが、私が憑依する前の犬はいつたいていどうしていたのだろうか？いくらなんでもLv. 2は不自然なほど低い。

それとも、ホーンラビットを食ったことがあるのは数えるほどしかなく、普段は別のものでも食べていたのだろうか。

まあ、ほかに私が現在1日に狩っているホーンラビットが多いということも考えられる。他の野犬だと、普通一日に何匹も狩らないのかもしれないな。事実、一匹狩れば十分お腹いっぱいになるのだ。

それでも私がホーンラビットを狩るのにはわけがある。

といつても、単にレベルを上げただけだが。

やはりレベルを上げると身体能力が上昇するようで、このどんな危険があるかわからない世界で生きる以上、強くなっておいて損はないだろう。それに私はRPGをやってもレベル上げに情熱を燃やすタイプだったしな。

一匹食べば十分なホーンラビットを一日に何匹も食べるのか？  
と思われそうだが、なぜかレベルが上がると空腹になるのである。  
身体能力上げるのにエネルギーでも使っているのだろうか？

そうそう、ホーンラビットをあっさり狩れることについてだが、  
あいつらは遅いわそこら中にいるわけで、実際のところ入れ食い状態だ。何しろ角にさえ気をつければ怪我を負う心配もないので弱い。  
あんな生物が良く生き残っているものだと言問に思うほどだ。あんなに狩りやすい生き物なんてすぐに絶滅してしまいたいようなものだが、  
この森だけでも大量にいるのである。不思議だ。

ともあれ、今日の私はこのところ主食と化しつつあるホーンラビットのことは忘れ、別な獲物を狙っているのである。

そいつはこの世界に来た翌日、偶然見つけたのだが、苦戦しそうに思えたのでその時は逃げたのだ。

緑色の肌にて足歩行する人間の子供くらいの体躯。盛大に尖った鼻と耳。醜悪な面の中でなぜだかつぶらに見えてしまう瞳。

ファンタジーな世界代表ザコモンスター、ゴブリンである。

2 .

森の中を進むと街道らしきものが見えてくる。といつても、アスファルトや石畳で舗装されているわけではなく、単純に土が踏み固められて草が生えていないだけの原始的なものだが。

その街道には細い溝が走っていて、おそらく馬車か何かの跡ではないかと勝手に推測しているのだが、今は無視だ。

この街道から少し外れて森の奥へと一時間ほど走り続けると、ゴ

ブリンの集落があるのだ。

これまでの探索で分かった成果である。それ以外にも水場（川だ）の場所なども判明している。街道の事と合わせて、この三つが主な探索の成果だ。

ゴブリンの集落には向かわず、その周辺の森を探索してみる。

まあ、集落になんか今は危険すぎていけないし。なるべくというか、一匹（それとも一頭？と呼べばいいのだろうか？）でいるゴブリンを狙うつもりだ。複数いるとこちらがやられてしまうだろう。しばらく森の中を探索する私。

すると 野生の感 に何かが引つ掛かった。

ちなみに 野生の感 のスキルは、こうして狩りをするときに獲物を見つけるのに役立つ。ホーンラビットもこれで探していたし。だが一度以上遭った生物にしか効果はないらしい。狼や他の野犬がいるかなと思って探してみたことがあったのだが、まったく感に引つ掛からなかった。事実、こうして私がこの森にいるのだから、狼はともかく他の野犬くらいいいそうなものだが。

ともあれ、ゴ布林は何度か森の中で見かけた相手である。

野生の感 に従って森の中を進むと、実にあっさりが見つけることができた。

私の視力で、出来る限り遠くから目視できる距離を保ちつつ、発見した緑の小人を確認する。

どうやら一匹のみのようだ。

腰に何やらぼろい毛皮を巻いている以外は、ほぼ全裸である。右手に木の棍棒、左手に絶命しているらしいホーンラビットをぶら下げている。

狩りの帰りのようだ。

このまま後をつけても、ほどなく集落に辿りついてしまうだろう。そうすると襲うのは難しくなる。襲うならば今しかない。

幸い、向こうのゴ布林は刃物の類を持っていないようだ。何度か目撃したゴ布林の中には、錆びたナイフやボロボロの剣を持つ

ているやつもいたからな。もし刃物を持っていたら、襲うのは断念せざるを得なかっただろう。たとえ首筋に噛みついて、刃物を突き立てられると治療する術のない今は死んでしまう可能性が高いからだ。野生では少しの傷も命取りになる。化膿してしまったら肉が腐ってしまうからだ。

刃物を持っていないとはいえ、さすがにホーンラビットよりは手強いだろう。

多少、緊張しつつも、私は遠回りにゴブリンの背後へと回った。

そして大きな足音を立てないように近づいていく。全力で走らず、速足くらいで駆ける。

ゴブリンとの距離が近くなるほどに、さらに速度を落とし、足音と気配をできるだけ殺していく。

まだゴブリンは気付かない。

距離が10メートルを切った辺りで、私は一気に飛び出した。

「ウォンッ!!!」

まだ振り向かないゴブリン（馬鹿だ）にわざと吠えることで、こちらを振り向かせる。

直後、私は地面を蹴って跳んだ。

振り返ったことでこちらを向いた首筋に噛み突き、牙を突き立てる。

「ギギーッッ!」

悲鳴を上げながらも、ゴブリンは持っていたホーンラビットの死骸を放し、左手で私の胴体の辺りを掴んだ。必死に引き剥がそうとしているが、そんな程度で引き剥がされる私ではない。

と、腹のあたりに強い衝撃。

「……………ッ!」

どうやら棍棒で叩かれたか突かれたかしたようだ。これがナイフや何かだったら私は死ぬしかなかったな。まあ、だからこそ棍棒しか持っていないゴブリンを襲ったわけだが。

その後も強い衝撃が私の体を襲う。

しかし、私はゴブリンの首筋から牙を抜くことはない。より一層  
噛む力を込めて必死に耐える。

「……ギ、ギ……」

どれくらい経っただろうか。

自分ではかなり長く感じたが、本当は数分もないだろう。

ようやくゴブリンの体から力が抜け、地面に倒れた。

私は突き立てていた牙を抜き、本当に死んだか確かめるため、ゴ  
ブリンの醜悪な顔面に爪を立てて引っ掻いてみた。赤い線が三本走  
るが、ゴブリンはぴくりともしない。

どうやら本当に死んだようだ。

私はというと、殴られた腹部がじんじんと痛みを訴えているが、  
それ以外は無事である。

オカアサン、ボク、ヤターヨ！

ゴブリン、ヤターヨ！

と、ひとしきり達成感と歓喜に打ち震えていると、

ポーン

と頭に音が響く「感覚」

むずむずする額に意識を向けてみると、ステータスが浮かび上が  
った。

【個体名】ハヤト・コウサカ

【種族】犬・雑種 Lv.7

【称号】森の狩人

【職業】猟犬

【パッシブ・スキル】野生の感

【アクティブ・スキル】威嚇の吠え声

なんと、レベルが上がった。



ここ最近ではホーンラビットを5、6匹は倒さないとレベルが上がらなくなっていたのだが、ゴブリンは一匹倒しただけでレベルアップである。

それだけゴブリンが強いということか、それともホーンラビットが弱いということか。

一匹倒しただけでレベルが上がったのは正直予想外だが、これは嬉しい誤算だ。

レベル以外にも【称号】と【職業】が変わっている。森の狩人と猟犬だ。なんかカツコイイな。というか私、人ではないけど「狩人」で良いんだろうか？

さらに【アクティブ・スキル】が発生した。威嚇の吠え声って、さっきゴブリンを振り向かせたあれかな。まあ、これはどんな効果を持つのか要検証だな。

レベルアップして嬉しいが、喜ぶのはここまでにしよう。ここはゴブリンの集落が近いし、早く離れるべきだ。

私はゴブリンが捕まえていたホーンラビットを持っていこうか迷ったが、私の口は一つしかない。

ウサギはしぶしぶ諦め、私はゴブリンの首筋にもう一度牙を突き立て、ずりずりと引きずって行った。

3 .

私がゴブリンの死体を引きずって来たのは、川近くにある木の洞で、現在はここをねぐらにしているのだ。しかもこの周辺にはホーンラビットくらいしかおらず、私の匂いでマーキングもしているの、私より弱いやつは近づかない。

ちなみに、マーキングしたときにわかったが、私はオスだった。

変な話だがオスだと知ったときは安心したものだ。これがメスだったりしたら、私は貞操の危機を迎えることがあるかもしれない。

犬にレイプされるなんて、想像しただけでトラウマである。

私は木の洞の中に運んだゴブリンに、さっそくかぶりついた。食うのは主に内臓だけである。ホーンラビットも同様で、筋肉とかは筋張って硬いしまずいのだ。いやまあ、ホーンラビットとかはちゃんと解体すればやわらかい肉がそれなりにあるに違いないが、牙と爪だけで毛皮をはがして全身食うのは面倒なのだ。

それに内臓が一番うまい、というのもある。

そんなわけでホーンラビットの食い残しはそのまま放棄していた私だが、ゴブリンはそうもいかない。はらわた食い散らかされた死体がゴブリンどもに発見された暁には、犯人捜しで野犬狩りなど行われてはたまらないからな。

ここまで運んできたのは、川が近いので、食い終わったら川に流してしまおう、という考えだ。

グチャ、ビチャ、クチャリ、と。

なんとも瑞々しい音が洞の中に響き渡る。

正直、今の私が食事している場面などモザイクなしの3Dスプラッタそのものなので、人間だった頃の私なら即座に吐いていた自信がある。というか、そもそも仮にも人の形をしたゴブリンなど、食おうとも思わなかっただろうが。

それでもゴブリンを食おうと思ったのは、犬に憑依したためか、グロ耐性が異様に高くなつたためと、ゴブリンを初めてみたときに「食いでありそう」と思ったからだ。

元の世界でも人間の死体をカラスどころかネコやイヌだって昔は食っていたそうだし、食えると思ったのだ。

その結果。

(う、う、うめえ……っ！)

ゴブリンはホーンラビットより美味かった。

なんというのだろうか、単純にうま味がある、というよりは体中に力が漲るような感じだ。これはホーンラビットを食ったときにはなかった感覚で、一番近いのはレベルアップしたときにこんな感覚を覚えていたな。まあ、レベルアップした時の方がはるかに強い感覚を覚えるが。

確かめるためにもう一度ステータスを見てみたが、レベルは上がっていないかった。

いったい何なのだろうか。

滋養強壮の効果でもあるのか？

不思議である。

ともあれ、解らないものは解らないだろう。

はらわたを食い終わったゴブリンの死体をすっかり川に流し、ついでに水を飲んでから私は洞に戻って眠りについた。

これからはゴブリンを積極的に狩ろうかな、と思いながら。

## 第二話 精霊(?)と犬

1 .

私がこの世界にやって来てから二週間ほどが経っただろうか。

あれから森の探索も安全を第一にしつつも進み、色々なことが分かった。

まず一つ目、この森の事である。

どうやらこの森は東西に長く伸びており(この世界の方角がどうなっているかわからないため、便宜的に太陽が昇る方角を東とする)、東側の端には、私が住みかとしている洞の近くにある川が流れ込む、大きな川があった。こちらの大きな川がおそらく本流であろう。そして西側だが、こちらは遠目に見ただけだが、巨大な山脈が連なっており、その麓まで森が伸びている。

一方、北から南へはそれほど広がっておらず、いうなれば山脈の麓を底辺として、巨大な川に向かってどんどん細くなっていくようなピラミット型(というには少々曲線的だが)になっている。

以前、森の中に街道が通っているといったが、それは北から南へ森が細くなっている部分を横断するように通っているようだ。私の住処も、比較的この近くにあり、ゴブリンたちの集落はここよりさらに山脈側へ行っただところにある。

次に二つ目。

どうやらこの森には私以外の犬がいるようである。

というのも、そろそろ日課と化しつつあるはぐれゴブリン狩りの最中、私以外の犬を見つけたのだ。やつは黒い毛皮に尖った耳、良く引き締まりながらも躍動感あふれる筋肉質な体躯をしていた。その鋭くも凜々しい瞳はなかなか理知的であった。強いて前の世界での犬に当て嵌めるならば、ドーベルマンとニホンオオカミを足し

て二で割ったような、そんなカツコイイ姿をしていたのである。  
しかし。

しかしである。

やつは三匹ほどのゴブリンの集団に率いられていた。つまり、飼われていたのだ。

家畜である。

私は内心、その犬に侮蔑的な視線を投げかけていた。

ゴブリンごときに飼われるとは、何たる情弱か！ 私の同胞だとはとても信じられぬね！

などと思っていた時。

「ウォンッ！」

百数十メートル先で、その犬が吠えた。

私の方を見て。

勢い良くこちらに向かって走り出す犬。そしてそれを鈍足ながらも追う三匹のゴブリンたち。

やっべー……、気付かれたわ。

や、やるじゃなあい……。

少々、愕然とする私。そして今更ながらに私が奴らよりも風上にいたことに気づく。

これを教訓に今度からは風の向きにも気をつけねばならないか。

ともかく今は逃げよう。

ゴブリンどもを狩り始めてから一週間、だいぶレベルが上がったとはいえ、刃物を持ったゴブリン三匹と犬一匹相手は、さすがに無理だ。

私は踵を返して逃げ出した。

だが、驚くべきことに一キロほど走っても、ゴブリンどもはともかく、あの犬を振り切ることはできなかったのだ。

このまま逃げるのも面倒だ。それになによりたかが家畜の犬一匹

に遅れをとる私ではないッ！

私は足を止めて振り向いた。

しばらく待つと、犬が私に追いついてきた。

「グルル……ッ！」

生意気にも私に向かって威嚇する犬。

いいだろう。本当の威嚇がどういったものか、みせてやるうではないか。

「ウォンツツッ……！」

威嚇の吠え声 を発動して盛大に吠える。

このスキルは格下相手ならば怯ませ、同等か格上相手ならば注意を一次的に引き付ける効果がある。

犬はビクツとした後、「クウーン……」と鳴き声を上げる。

「グルル……」

駄目押しで唸り声を上げる私。

犬は踵を返して逃げ出した。

……………。

ふ、ふふふ、ふうはははははははッ！

あれが尻尾巻いて逃げる、ということかね。まったく、情けない。

所詮は畜生か。ははは。

まあ、それもそのはず。

私の現在のステータスはこうだ。

【**個体名**】 ハヤト・コウサカ

【**種族**】 犬・雑種   LV・13

【**称号**】 森の狩人

【**職業**】 猟犬

【**パッシブ・スキル**】 野生の感

【**アクティブ・スキル**】 威嚇の吠え声、鑑定眼

そして、さきほど私を追ってきていた犬のステータスが、こうである。

【個体名】グギギ・ギギガ

【種族】犬・雑種 Lv. 4

【称号】森の猟犬

【職業】猟犬

【パッシブ・スキル】野生の感

【アクティブ・スキル】なし

所詮はLv. 4の犬など、Lv. 13の私の敵ではないのである。というか、名前がグギギ・ギギガって、ゴブリンに名づけられたからか？ 憐れな奴……。

それにあの犬の【称号】が「森の狩人」ではなく「森の猟犬」なのはどうしてだろうか？

ん？

なぜ犬のステータスなど見えるかって？

それは私の増えたスキル 鑑定眼 の効果によるものだ。

これが新しい知識三つ目である。

ホーンラビットやゴブリンの肉ばかり食べていた私だが、森の生活にも少しずつ慣れてきた頃、ふと思ったのだ。

ビタミンとか、どうしよう、と。

いや、肉や内臓にはビタミンとかちゃんと含まれているともの本で読んだ記憶はあるのだが、それだけでは摂取できないものもあったような気がする。うる覚えの知識なので何とも言えないが、壊血病とか脚気とか罹ったら嫌だ。

野菜もちゃんと食べるべきだろう。

とはいえ、野菜などこの森の何処にあるのかわからないし。

野草とか食べるべきなんだろうか。

私はその日からいろんな野草を見つけては匂いを嗅ぎ、この犬の体にもともと在った知識などをどうにか掘り出しつつ、かつ念のため少し食べては時間を置いて毒の有無を確認しつつ、少しずつ食べられる野草を見つけていった。

そんなことを繰り返しているときだった。

ポーン

もはや恒例になりつつあるあの音の「感じ」

え？レベル上がった？と思いつつ、私は額に意識を向けた。

するとレベルは上昇していないが、【アクティブ・スキル】の欄に 鑑定眼 が増えていたのだ。

いろいろと検証してみた結果、このスキルはかなり使えることが分かった。

たとえば野草などに 鑑定眼 を使ってみる。するとこのように見える。

【個体名】なし

【種族】草・ソシ草 LV・1

【備考】食用草。塩と合わせて保存食に利用されることもある。

【個体名】なし

【種族】キノコ・マシュー茸 LV・1

【備考】毒あり。命と引き換えに至上の快樂を得ることができる。

こんな感じで、見たい情報がある程度知ることができるらしい。ちなみにこの時は「食べられるかどうか」を念頭において調べた結果である。

しかし、これにも制限がある。



上のステータスを見てもお解りの通り、この世界の生き物にはたいていレベルがあるのだが、このレベルが自分よりも高かったり、あるいは自分よりも種族的に優位に立つものに対しては、情報を得られないことがある。

たとえばゴブリンなどはこう見える。

【個体名】 ????

【種族】 妖精族・グリーンゴブリン    Lv. ?

上のステータスはLv. 4のゴブリンの場合で、これがLv. 3のゴブリンなら、なんとか名前とレベルくらいはわかる。しかし【称号】 【職業】 スキル欄は全く見えないのだ。自らより上位種、それもゴブリン程度の存在でさえ10レベルも離れていないとろくに情報を見られないとは。

ゴブリンごときにこれとは、どんだけ私の種族は弱いんだろうか。軽く落ち込む。

だが、まあ。それでも 鑑定眼 のスキルが有用であることに変わりはないのだが。しかし、どうやらレベルに関係なく情報がまったく見えない存在もいるようなのだ。

2 .

満天の星空と煌々と輝く三つの月。

私は住処の近くにある川原で、一際巨大な岩に登り、見るともなしに「それら」を眺めていた。

「それら」とは、無数の光の粒である。赤い光、青い光、緑の光、茶色の光、白い光に黒い光。すべてビー玉ほどの大きさもない小さなものだが、いつでもどこでも無数にある。

今、この場で、というならば、青い光と黒い光が一番多いだろう

か。

これらは 鑑定眼 に関係なく、実はこちらの世界に来た時から見えていた。

最初は勘違いかな、と思う程度だったのだが、よくよく目を凝らしてみると色とりどりの光の粒が無数に乱舞しているのである。一週間もこちらの世界にいる頃には、これは幻じゃないと思うようになった。しかし、触ってみよう思い前足でワンコパンチを繰り出しても、あっさりとすり抜けてしまうのである。

触れないのでやはり自分の目がおかしいか、幻なのか、とぐるぐると同じことを考えてみたり。

しかし、犬とか動物は人間には見えない何かを見ることができ、なんていうのは良く聞いた話だ。

鑑定眼 を覚えてから、すぐに使ってみたが、何も反応しなかった。

しかし、その正体にはある程度の推測を立てている。

こいつら、精霊じゃね？

だって水場には青い光が、空には緑の光が、地面や森には茶色の光が、日中、熱せられた岩肌の近くには赤い光が、昼は白、夜は黒い光が多く見られるのだ。

私のゲーム知識的に、火、水、風、土、光、闇の精霊だと思うのだが。

そうして精霊だと思ってみれば、精霊魔術を使いたいと思うのが人情だろう。いや、犬情だろう。

私は今日も彼ら精霊（仮）に向かって、あらん限りの中二的呪文を唱えてみる。

風の精霊よ、契約により（してないけど）私の敵を切り裂け！

ウィンドカッター！

「ウオオウ、ウオウウオオオオ！ ウオウウオオー！」

しん……、と静まり返る川原。

当然ウィンドカッターなど出るはずもなく。

やはり犬では無理なのか、それとも犬語ではだめなのか。

今日も私は頂垂れる。

良い歳して何をしていんだろうか、私は。

我に返ると急激に羞恥心に襲われる。

と、精霊（仮）たちが私の近くに寄ってくる。

私の目の前を左にゆらゆら、右にゆらゆら。

あ。あ。あ。

ああ~~~~ッ！

私は跳び上がった。

ピヨーン、スカッ、タシッ。

ピヨーン、スカッ、タシッ。

何をしているのかといえば、跳び上がり（ピヨーン）、精霊にワ  
ンコパンチをくれ（スカッ）、着地する（タシッ）を繰り返してい  
るのだ。

どうやら「今日もまた」私の内に眠る邪悪な本性が目覚まして  
しまったようだ。

精霊たちと戯れながら、今日もまた夜が更けていった。

### 第三話 狼リーダーと犬（前書き）

今回はちょっとシリアスかもしれません。

### 第三話 狼リーダーと犬

1 .

私は一匹のゴブリンと闘っていた。

それ自体はいつものことなのだが、今日のゴブリンはナイフ持ちのゴブリンだ。

今までなら闘わず、逃げていた相手である。

「グルルル……」

木々が密生する森の中で、私はグルグルとゴブリンの周囲を回っていた。

「グギ、ギギ」

視線の先では威嚇なのか何なのか、ゴブリンも声を上げている。いつもなら首筋に噛みつくだけで倒せる相手である。ここに来た当初、あるいはゴブリンを標的に定めた当初ならば念には念を入れて、背後から奇襲していたが、レベルもずいぶん上がった今では真正面から闘っても負けはない。

しかし、それは首筋に噛みつくという行為が絶対に不可欠だ。急所を狙わなければ確実に殺せない。だが、それをすればゴブリンが絶命するまでの間、私が無防備になってしまう。

ゆえに、刃物を持つゴブリン相手にこの戦法は選べない。

ならば、まずは手に持つナイフを何とかしてしまおう。

周囲を回りながら 鑑定眼 でゴブリンのステータスを確認する。

【個体名】 ギギ・ググ・ガガグ

【種族】 妖精族・グリーンゴブリン L V . 5

【称号】 盗人初級

【職業】森の盜賊

【パッシブ・スキル】子孫強制

【アクティブ・スキル】なし

レベルも低いし、戦闘に役立つスキルもない。

このレベル差なら、何とかいけるだろう。

私は 威嚇の吠え声 を放った。

「ウオウウ……ッ!!!」

硬直するゴブリン。

やはり、効いた。目の前のゴブリンは私より遥かに格下である証拠だ。

私はゴブリンが硬直したのを確認し、即座に駆ける。走る。跳びかかる。

目標は首筋ではない。

ナイフを持った右腕だ。

ガチンツ！と、音が鳴るほど全力で噛みついた。

「ギャアウツ！」

悲鳴を上げて腕を振り回し、私を振りほどこうとするゴブリン。

私はそれにさらに噛みつく力を上げながら、全力で対抗する。顎以外のすべての力を抜き、顎だけに力を入れ、顎だけに意識を集中する。私は今、顎しかない。そう思い込む。

自分なりのコツのようなものだ。こうすると体の一部だけだが、力が増す気がするのだ。

ぶんぶんと思い切り腕を振り回すゴブリン。離れない私。

が、しかし。

何度目かに腕を振られた時、私はゴブリンによって振りほどかれ、数メートルを宙に舞った。

ゴブリンの、腕ごと。

「ギーーーーッ！」

ゴブリンの悲痛な声を聞きながら、私は空中で体をひねり、難なく着地した。

私の口には噛み千切ったゴブリンの腕が啜えられている。

レベルアップすると身体能力が上昇する。

それも10レベル以上上がるとここまで違うのかと、私は感動していた。おそらく、もう少し硬いものでも今なら噛み千切れるだろうという確信がある。それほどに余裕があったのだ。

やはり私は強くなった。

「グルル……！！！」

歓喜のまま獰猛に笑う、といってもそのつもりなだけだが。

私は右腕と武器を失ったゴブリンに向かって、真っ直ぐ駆けた。

あとはいつも通りの、ただの作業だ。

首筋に噛みつき、殺し。

ポーン

「音」が鳴った。

2 .

ゴブリンを倒したあと、いつものように自らの住処である木の洞まで死体を運び、ゴブリンにはまだ口をつけずにまず、ステータスを確認してみた。

【個体名】ハヤト・コウサカ

【種族】犬・雑種 Lv.23

【称号】森の狩人

【職業】 猟犬

【パッシブ・スキル】 野生の感

【アクティブ・スキル】 威嚇の吠え声、鑑定眼

うむ。どうやらレベルが上がったようだ。

といっても、Lv. 22から一つ上げるのに、七匹ものゴブリンを倒さねばならなかったのだが。

ここ最近、どんどんレベルが上げにくくなってきているのだ。やはりここらで新たな狩り場を開拓する必要があるかもしれないな。

ああ、そうそう。

鑑定眼 についてだが、ゴブリンとはいえ、Lv. 5とLv. 2の差があればさすがにステータスを見ることはできるようだ。

私がこの世界にやってきて、およそ一カ月ほどが経っていた。

今では精霊(?) については後で調べることにして、レベル上げに勤しんでいる。そのおかげというか、そのせいというか、ゴブリンの集落でも何やら警戒し始めたらしく、単独で活動するゴブリンを滅多に見かけなくなったのだ。常に複数で行動しているため、狩りがしにくいこと。

なのでゴブリンの集団をおびき寄せ、一匹ずつ足を何度も爪で攻撃して足止めとし、一匹だけ攻撃を加えなかったゴブリンだけをさらに別の場所へ誘導するという、なんとも面倒くさい手間が必要になってしまったのだ。

さきほどのゴブリンについてもそうなのだが、それでも普段は武器持ちのゴブリンを標的にすることはない。

今回は私がどれほど強くなったか確かめるための試金石である。結果はまず上々と言えるだろう。

この調子なら、武器なしの集団くらいならば正面から撃破できそうである。

私はゴブリンにかぶりつき、今日もそのはらわたを食らう。



なぜだかわからないが、食べれば力が増すような、不思議なはらわたである。この秘密もいずれは解き明かしたいものだ、と思っている。

そうして朝食となるゴブリンを食った後。

私は森を西へ向かって疾走していた。ゴブリンの集落がある辺りよりも、さらに西である。

今までなら警戒して行かなかった場所だが、今回は狩り場開拓のためだ。少々の危険くらい冒す価値はある。それに今の私ならどんな奴相手でも逃げるくらいはできるだろう、という自信もあった。

後から思えば、どうかしていたとしか思えない。

3 .

私が「それ」に気づいたのは、だいぶ山脈の裾野付近へと近づいた頃だ。

周囲の森は山脈の方へ進めば進むほど険しくなっていくようで、植生する木々も太く、生命力に溢れている。

私は愚かにも自らの力を過信し、周囲を警戒していなかったことに気付いた。

二オイ。

私の本能に警鐘を鳴らす、危険極まりない臭いがする。急いで疾走を中止する。

しまった。どうやら何者かのナワバリに入り込んでしまったようだ。しかも私の全身の毛が逆立つ。この感じ、囲まれている？ こっちを見られている？

ナワバリの主たちは、すぐに姿を現した。

どうやら私は完璧に囲まれていたようだ。結構な速さで走ってい

たつもりだが、彼らにとつては走りながらも集団で囲めてしまう程度の速さだったわけだ。

私は井の中の蛙だった。

狼の群。

それも見事な漆黒の毛に覆われている黒狼たちである。

皆、私よりも二回りほど大きな体躯をしている。金色に輝く瞳からは知性と威圧が伝わってくる。

なんとこの存在感か。闘わずとも解る。強い。おまけに 鑑定眼を使っているのだが、まったくステータスが見えない。彼らが私より遥かに格上の種だという証拠だ。

しかし、黒狼たちならばまだどうにかなった。逃げるくらいはできただろうし、私のこの森で鍛えられた戦闘に関する感は、私と黒狼一匹とでは、わずかに私の方が強いと伝えてきている。

しかし、である。

本当に私は自惚れていた。

「やつ」が現れた途端、私の全身は竦み上がり憐れな敗北者になり下がってしまった。

きらきらと光り輝く水色の体毛。全高はゆうに1メートル50を超えるだろう。全長に至っては3メートル近い。瞳ばかりは他の黒狼たちと同じ色だが、この群の長なのだろうか？

水色の巨狼であった。

目を凝らすまでもない。

やつの周囲に物凄い数の水の精霊（仮）が集まっていた。ここに水場はないというのだ。

今の私が来るべきではなかった。

私は尻尾を股の間に入れ、無様にじりじりと後ろへ下がっていく。が、どうやら奴らのテリトリーに無断で侵入してしまった私を巨狼はただで許すつもりはないようだった。

「ウオオオオオオンン……ッッ！」

巨狼が吠えた途端、奴の全身から青白い霧が噴出した。たとえるなら濃密な蒸気が僅かに発光しているような、そんなもやもやとしたもの。

次の瞬間、驚くべきことが起こった。

巨狼が出した霧（？）をその身に受けた水精霊たちが、奴の意を受けたように組織だった動きをした。

中空に集まり球体を成す。

それは直径50センチほどの水の玉となって、私の方へ高速で飛来した。

とはいえ、ただ真っ直ぐ飛んでくる水の玉など避けるのは容易い。私はサイドステップで左に避けた。

ドオオオオンッ！と。

背後で凄まじい轟音。

反射的に見やれば、私が背にしていた大木が、その半ばまで抉り取られていた。

もはや冷や汗も出ない。

避けなければ確実に死んでいた。

ともあれ、私は今の自分の状況を思い出し、とっさに後ろへ跳びながら前に向き直り、

目が、合った。

近い。巨狼が目と鼻の先にいる。

奴は青白い霧を纏った前足で、私を払った。

爪を叩きこまれたのではない。ただ邪魔なものを退かすように、足の甲（？）で払われただけだ。

だが、それだけで。

私は十数メートルを飛んだ。

大木に叩きつけられ、私の視界は一瞬途切れた。

4 .

意識を失っていたのは本当に一瞬だ。

だが、巨狼からしてみればその一瞬だけで私の息の根を止めるには十分すぎる時間だっただろう。

全身を激痛に蝕まれながら、私は必死に起き上った。

「クウーン……」

私の口から弱々しい声が漏れる。

無様だ、と思いつながら巨狼の方を見れば。

奴は私に背を向けて立ち去るところだった。

もはや私に微塵の興味もないとばかりに。

巨狼に従い、ぞろぞろと去っていく黒狼の群。

私は森の中に取り残された。

人間だった頃、私は喧嘩などあまりしたことがなかった。臆病な奴と言われれば、そうなのかもしれない。不良など遠くから見ただけで忌避したものだ。

要領よく。安全に。

それが私の人生の指標だった。

が、しかし。

一匹の獣となった今の私にとって、果たして要領よく、安全に、などと言うことが正しいのか。

いや、違うな。

私がどうしたいかだ。私がどう生きたいかだ。

ここには煩わしい人間関係も、いちいち行動を制限してくる法律もない。

ならば。

私の心はすでに決まっていた。

男なら一度は夢見たことがあるはずだ。私がゲームでさえ強くなることに拘っていたように。

帰り道。

とても軽快とはいえない速度で歩きながら、私の胸中は反骨心で溢れ返ってしまいそうだった。あの時の巨狼の態度を思い出せば、私の無様さや惨めさと共に怒りや憎悪に近い感情が湧いてくる。私の腹は決まっていた。

最強。

それを目指す。

ならばまずは、手始めに巨狼を倒すことから始めようではないか。

### 第三話 狼リーダーと犬（後書き）

はやく犬を人里に下ろしてしまいたいんですが、あと数話ばかり  
そうです。

それに戦闘シーンを描写するのはやはり難しいですね。

次回は犬強化回です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1919ba/>

---

異世界で犬に憑依した

2012年1月6日11時46分発行